

家庭的保育のあり方に関する調査研究 (4)

研究企画・情報部 小山 修
子ども家庭福祉研究部 庄司順一
嘱託研究員 尾木まり (子どもの領域研究所)
斎藤多江子 (高崎健康福祉大学短期大学部)
須永美紀 (國學院大學幼児教育専門学校)
客員研究員 網野武博 (東京家政大学)
前天理大学 上村康子
駒沢女子短期大学 福川須美
NPO 法人家庭的保育全国連絡協議会 鈴木道子
埼玉県立大学 高辻千恵

要 約

本研究では家庭的保育の質の担保と向上を目的として、評価システムのあり方について検討をし、家庭的保育で最低限行われていることが期待される68の評価項目を基礎編として作成した。この評価項目の妥当性を検証するため、家庭的保育者を対象に質問紙調査を実施し、評価項目についての自己評価を求めた。その結果、多くの項目においては自己評価が高い傾向が見られたが、全体として計画、記録の作成・保存、文書の作成・保存、関係機関との連携・活用の状況などでは、保育者自身もまだ十分でないと感じる評価が見られた。今後、研修等により理解を深め、実践の方法を学ぶ機会を設けることが必要であると同時に、家庭的保育支援者、巡回指導者、連携保育所の園長などとも意見交換をすることにより、改善への糸口を見いだすことにつながることを期待される。また、本評価項目を巡回指導者や家庭的保育支援者など他者からの評価項目としても活用が可能かどうか検証を行うことが今後の課題である。

キーワード：家庭的保育 家庭的保育者 自己評価 保育内容 評価項目

An Investigation of Japanese Family Day Care (4)

Osamu OYAMA, Junichi SHOJI, Mari OGI, Taeko SAITO, Miki SUNAGA
Takehiro AMINO, Yasuko UEMURA, Sumi FUKUKAWA, Michiko SUZUKI, Chie TAKATSUJI

Abstract : The goal of this research was to develop an assessment system for family day care (defined as day care for young children under three years old practiced in carer's own home), to promote the betterment of care. The adequacy of a 68-item assessment form was tested in a questionnaire survey of family day care workers, as a checklist self-assessment. The results showed that family day care workers evaluated many items positively, but items with regard to planning, record-keeping and documentation, and cooperation with and utilization of other agencies were evaluated as insufficient. It is apparent from these data that professionals need to gain a better understanding of role of the family day care workers through training and learning of good practices, and also that improvements can be made through discussions with supervisors, and directors of cooperate nursery schools. The next task in this ongoing research is to examine the viability of an assessment form for other individuals, such as supervisors or supporters of family day care workers.

Keywords : family day care, family day care workers, self-assessment, contents of day care, assessment items

I 研究の背景と目的

本研究は、保育者の居宅等で主として3歳未満の児童を対象に小規模で行われる家庭的保育に焦点をあて、家庭的保育のあり方を検討することを目的として実施する研究の4年目である。本研究においては、初年度¹⁾に全国の人口10万人以上の区市を対象とする、家庭的保育の実施状況および今後の取り組みに関する質問紙調査の実施、2年度²⁾には先行研究レビュー、実施自治体より収集した資料分析、自治体を対象とした研修に関する質問紙調査並びにヒアリング調査などの結果について研究班で討議を重ね、『家庭的保育のあり方に関する報告』としてまとめた。3年度³⁾⁴⁾は家庭的保育の研修体系を構築すると共に、研修実施の課題をまとめた。

家庭的保育事業の法制化(2010年4月)に先立ち、2009年10月には国より省令の改正及びガイドラインが通知され、実施基準が示された。その中で、「都道府県においては家庭的保育に類するものに対する指導監督については児童福祉法や省令、ガイドラインにそって行う」という方向性が示されたことにより、家庭的保育の標準化が図られようとしている。

家庭的保育は市町村により実施される事業であるため、地方単独事業・国庫補助事業の別にかかわらず、自治体ごとに異なる実施基準を用いて行われてきた。また、家庭的保育者の居宅で行われる保育であることから、家庭的保育に共通する水準を持たないまま、個々の保育者が有する専門性や資質に依拠しながら発展してきたと言える。本研究²⁾でも明らかにしたように、ほとんどの自治体で就業前研修が行われていなかったことから、それぞれの家庭的保育者が試行錯誤しながら作り上げてきたものである。現在、保育内容に関するチェックリストを用意している自治体は数カ所にすぎない。

今後、質が担保された家庭的保育事業が実施されるために、昨年度研究で検討した家庭的保育の研修体系にそって研修が実施されるとともに、評価システムの導入は欠かせない。そのため、本年度研究では、家庭的保育の評価をどのように行うべきかその方法の検討を行い、必要となる評価項目を具体的に作成することを目的とした。

II 研究の方法

1 文献調査

保育所における第三者評価や自己評価を始めとし、関連施策における評価の仕組みと、諸外国における保育環境スケール等の検討を行い、日本における家庭的保育にふさわしい評価のあり方について検討した。

2 評価項目の作成

文献調査の結果を踏まえて、評価の対象とする内容を検討し、家庭的保育のための評価項目を作成した。

3 評価項目についての検証

2で作成した評価項目の妥当性を検証することを目的として、家庭的保育者を対象に質問紙調査を行った。対象はNPO法人家庭的保育全国連絡協議会会員の家庭的保育者105名、調査時期は平成22年1月4日～31日である。

調査内容は回答者のプロフィール、所属自治体の制度、自由記述の他、評価チェックシート4分野68項目について、3段階の自己評価(A:できている(以下A評価)、B:やっているが、改善が必要(以下B評価)、C:できていない、または、やっていない(以下C評価))を記入してもらった。

また、評価項目の文章がわかりにくい、表現が難しいと感じるところには、メモを書き込むように依頼した。

4 倫理的配慮

質問紙の送付にあたっては、協力依頼状により本調査の趣旨を説明し、結果については統計的処理を行い、個人情報に関して迷惑をかけることのないよう配慮することを説明した。

III 結果と考察

1 家庭的保育における評価方法の検討

保育所をはじめとする児童福祉施設では、自己評価、利用者アンケート、訪問調査から構成される第三者評価が2002年より実施されている^{5)~7)}。家庭的保育についても同様の方法で第三者の専門的な視点を取り込みながら評価することが必要であると考えられるが、家庭的保育の標準形への共通認識がまだ得られておらず、第三者による客観的な評価ができる段階にない。利用者アンケートは対象者数が少ないので匿名化して把握することは難しいが、利用者の評価に耳を傾ける機会は年間を通じてどこかで持つ必要があると考えられる。

環境評価に関して国内で使用されている評価尺度は海外で開発されたものの翻訳を始めとし、それを日本用に改訂したもの等いくつか散見されるが^{8)~11)}、言うまでもなく家庭的保育用に考えられたものではない。

また、諸外国ではファミリーデイケアの保育環境評価スケールの他^{12)~14)}、国や機関単位でチェック項目が用意されているところもある^{15)~18)}。しかしながら、わが国の家庭的保育とはその規模や基準が異なる点が多く、家庭で行われる保育ならではの評価の視点が必要になるものの、そのまま使用することは困難である。これらのことから、日本の家庭的保育にあう独自の評価の仕組みを検討することとした。

2 家庭的保育の評価項目の作成

評価項目を作成するにあたり、評価の対象、評価の実施者等の検討を行った。評価の対象は、監査対象となる事

項、環境整備、保育内容、子どもの発達状況などが考えられるが、家庭的保育においては客観的な視点で保育室の環境や保育内容、保育者の子どもへの関わり方について評価を受けたことがない保育者が多いことが予測され、それらを中心に検討することとした。

項目作成においては保育所保育を中心とする既存のチェックリスト¹⁹⁾²⁰⁾を参照したが、全体として項目数が多すぎることや、抽象的な表現が多く判断に迷うことが予測されることから、①家庭的保育者が一定の時間内にチェックできる分量とすること、②わかりやすい表現に配慮することに心がけた。また、家庭的保育の標準化がなされていない現状において、まずは③家庭的保育で最低限できていなければならないことを項目で構成し、それを基礎編とすることとした。

保育所保育指針には、「保育士等は、保育の計画や保育の記録を通して、自ら保育実践を振り返り、自己評価することを通して、その専門性の向上や保育実践の改善に努めなければならない」とし、自己点検・自己評価を通じて、保育者自らの気づきを促すことの重要性に触れている。本研究では、「保育者自らの気づき」を促すことに着目し、まずは家庭的保育者が自己評価するための評価項目を作成することとした。

ただし、自己評価だけで完結するのではなく、保育者の自己評価を確認したり、あるいは、改善が必要と感じられていることなどについて助言を得ることが可能となるように、「できている」、「できていない」だけの評価ではなく、その中間の評価（やっちはいるが、改善が必要である）を設けた。また、自己評価だけでなく、巡回指導者や家庭的保育支援者等にも、同じ評価項目を用いて評価をし、改善が必要な項目について話し合いができる仕組みとすることも必要であると考えている。

厚生労働省は2009年3月、「保育所における自己評価ガイドライン」²¹⁾を公表している。このガイドラインではチェック項目をあらかじめ設けない方法で行う自己評価のあり方が提示されているが、本研究では、このガイドラインで示された自己評価の観点を参照し、Ⅰ保育理念、Ⅱ子どもの発達援助、Ⅲ保護者に対する支援、Ⅳ保育を支える組織的基盤の4つの大きな枠組みに整理して、家庭的保育において最低限実施していることが求められることを表1に示した68項目にまとめた。

3 家庭的保育の評価項目に関するアンケートの結果

(1)回収率及び回答者のプロフィール

回収数80件、回収率76.2%であり、家庭的保育者の関心が高かったことが窺える。

保育者のプロフィール(表2)については、回答者の保育歴は、「10年～」が最も高く37.5%、「6～9年」(20.0%)、「16年～」(17.5%)と続いた。家庭的保育以外の保育サービスの勤務歴は複数回答であるが、認可保育所(48.8%)、幼稚園(18.8%)、認可外保育施設(16.3%)であった。保

育所勤務歴は約半数にあったが、勤務年数は16年以上が最も高く(28.2%)、次いで3～5年、10年以上が20.5%であった。

回答者の年齢は、50歳代が半数を占め(52.5%)、60歳代以上が約3割(28.8%)、40歳代14%の順であった。回答者の持つ資格については、保育士が最も多く(72.5%)、保育士資格を持たない回答者については、幼稚園免許(11.3%)、学校教員(6.3%)、資格なし(8.8%)であった。

所属自治体の制度(表3)については、約8割(78.8%)に連携保育所があり、研修受講時の保育については、4割が保育時間以外に受講をし、代替保育(32.5%)の活用や、休暇の取得(30.0%)が行われている。代替保育については、65.0%があると回答した。

(2)評価項目の結果

それぞれの評価項目の結果を表4に示す。

Ⅰ 保育理念について

I-1 結果の概要

全3項目で、家庭的保育に関する規定や関係法令の理解、遵守の状況、子どもの人権の尊重、保育を行う上で必要となる保育理念や保育目標について尋ねた。その結果、「子どもの人権に十分配慮し、子ども1人ひとりの人格を尊重している」は96.3%がA評価であり、達成割合が高かった。

規定や関係法令の理解については、A評価が7割弱(67.5%)、B評価が3割(30.0%)であった。保育理念と保育目標の設定については、A評価の割合が55.0%であり、B評価が33.8%と他項目より多く、C評価も8.8%あることが特徴的である。

I-2 結果の背景として考えられること・今後の課題

まず、子どもの人権に関する設問は全項目の中でも100%であってほしい項目の一つである。改善が必要と回答した3名が具体的にどのようなことを考えているかを知ることはできないが、研修等を通じて、この項目が100%となるようにすることが必要である。

家庭的保育に関する規定や関係法令については、どこまでを含むのか、又理解や遵守の程度についても曖昧な設問である。設問の下には、「規定とは児童福祉法、省令、ガイドライン、自治体の要綱など関係法令とは児童権利条約、児童虐待防止法」などとの注釈をしているため、個人の想定する範囲よりも幅広い項目が示されたと考えられるが、それでも「できている」が7割弱を占めており、理解の程度にはバラツキがあると考えられるが、規定や関係法令が少なくとも意識下にあると言えるのではないだろうか。

次に、保育理念と保育目標については、「保育所保育指針」を回答者がどのように捉えているかが回答を左右した可能性がある。実際に、「保育所保育指針なので・・・」という書き込みが見られたように、保育所保育指針は家

庭的保育に関係のないもの、あるいは家庭的保育とは異なる保育について書かれたものという認識が、B評価、C評価を選択させたと考えられる。また、それは「保育所保育指針に基づき」の部分で改善が必要なのか、そもそも「保育理念や保育目標を設定していない」のかは不明瞭である。後述される保育の計画と同様に、保育所保育指針が家庭的保育と重なる部分についての研修がより必要であると考えられる。

I-3 改善が必要と考えられる項目と案

「理解」という言葉が曖昧なことから、「最低限年に1回は内容の確認をする」という具体的な行動の確認に変え、「1. 家庭的保育に関する規定や関係法令は少なくとも一年に1回内容を確認し、遵守している。」に変更する。

II 子どもの発達援助

II-1 結果の概要

1) 日々の保育における具体的なかかわりと援助

全15項目のうち、直接的な保育者の子どものかかわり方についての項目については、おおむね80%以上がA評価をつけており、保育者が1人ひとりの子どもに対して応答的・共感的にかかわっている状況であると言える。

しかし、⑦「子どもの挑戦する気持ちや興味・関心を大切に様々な遊びを提供できるように配慮している」⑩「子どもが興味を持って探索活動を十分に行えるような遊具や玩具がある」⑭「様々な素材や用具に親しんだり、感動や発見ができる活動の工夫をしている」の3つの項目についてはB評価が比較的多く見られる。これらは、子どもが主体的に身の回りの環境にかかわることによって得る体験の保障につながる項目である。特に、⑩の探索活動を行うのに十分な遊具や玩具の準備については、B評価が41.3%にのぼり、子どもが好奇心を持って主体的にかかわることのできる物的な環境の整備については十分とは言えない状況と言えるだろう。

2) 保育の計画及び評価

全6項目のうち、A評価が80%を超える項目は見られず、全体的に十分に取組まれている状況とは言えないことがうかがえる。

③の子どもが主体的に遊びに取り組める環境の整備、⑤の日々の保育の内容の記録の項目についてはA評価が70%を超えるものの、実際の指導計画の作成・実施にかかわる3項目についてはA評価の割合が低く、B評価の割合が高い。具体的な項目の内容は、①「それぞれの年齢に合った指導計画を作成している」(A: 47.5%, B: 27.5%, C: 20.0%)、④「保育の中で用いる素材や材料などについて研究し、子どもに適したものを準備している」(A: 56.3%, B: 41.2%, C: 2.5%)⑥「振り返りを通し

ての気づきを、次の日、次の週の計画に生かしている」(A: 55.0%, B: 38.8%, C: 5.0%)であり、家庭的保育における計画の作成・実施・省察については改善の必要があるものと考えられる。

3) 健康と安全

3)-1 子どもの健康支援

子どもの健康状態の把握や家庭との情報の共有に関する項目については、いずれも全体の90%以上がA「できている」と評価しており、おおむね取組まれている状況と言える。

一方で、感染症等に関する知識と対応マニュアルの整備、医療機関との相談・連携体制に関しては、A評価が比較的低い割合となった。中でも後者についてはA評価が42.5%と半数以下と非常に低く、C「できていない、またはやっていない」が26.3%にのぼっており、外部との連携に関する取り組みの不十分さや難しさが浮き彫りとなる結果になっている。

3)-2 環境・衛生・安全の管理

①の健康支援と比較すると、A～Cの各評価の分散がやや大きい傾向が見られる。A評価が多かった項目としては、「採光・換気・湿度・温度など、子どもが心地よく過ごすことのできる環境の整備」(96.3%)、「緊急時の通報先・連絡先の準備」(92.5%)が挙げられるが、その他の項目に関しては全体の80%に満たないものが大半である。ただし、そのうちC評価をつけている保育者の割合が高いのは一部の項目に限られており、環境・衛生・安全の管理では「やってはいるけれども改善が必要と感じている」ことが比較的多い傾向が窺われる。

全体的な傾向と比較して、A評価の割合が低く、かつC評価が高い割合で見られたのは、「安全チェックリストの作成等、事故防止に向けた取り組みを行っている」

(A:47.5%, C:8.8%)、「火災や地震の発生を想定した防災計画がある」(A:63.8%, C:13.8%)、「緊急時の避難訓練を定期的実施し、その記録を保存している」(A:57.5%, C:22.5%)の3項目であった。これらの項目から、事故や災害の防止や対応についての文書による管理体制が不十分であることが考えられる。

II-2 結果の背景として考えられること・今後の課題

1) 日々の保育における具体的なかかわりと援助

日々の保育の中で、保育者が1人ひとりの子どもに対して、応答的・共感的にかかわっていると自覚しているという現状は、子どもの様子に常に目を配り、丁寧にかかわることができる家庭的保育の利点が示されたものであろう。保育者自身が、「低年齢児にとっての保育者の存在」の重要性を意識して子どもとかわっていることが窺える。特に、低年齢の子どもにとって、保育者との愛着関係が成長・発達の基盤となることを考えると、低年

年齢の保育にふさわしい環境であると考えられる。

しかし、子どもが自ら積極的に周囲の環境とかかわることによって得る体験につながるような物的環境の点においては十分であるとは言えない。保育の場となる家庭の中に準備できる遊具や玩具の数、展開できる活動や遊びには必然的に限度があることが困難さの一因であると考えられる。しかし、子どもの発達段階や興味・関心等に応じて、保育者が環境を意識的に変更し、設定し直していくことで、改善されていくのではないだろうか。また、日々の保育の中で、公園や児童館等の外部の資源を積極的に利用することや、限られたスペースを利用した遊び環境の設定を考えることも必要であろう。

2) 保育の計画及び評価

保育においては、計画的な環境構成と見直しをもった援助が重要であるにもかかわらず、保育の計画と評価に関しては、全体的に十分に取り組みが行われているという評価はなされていない。自分自身の取り組みをB、あるいはC評価とした保育者の保育歴はさまざまであることから、保育歴にかかわらず、家庭的保育における計画の作成には何らかの難しさがあるものと考えられる。

計画の作成については、コメントからも、計画を意識しながらも文書としては作成していない現状があるものと考えられる。また、保育の振り返りについては、日々連絡ノートを書くことにとどまっていることもうかがえることから、振り返りが計画に生かされているとは言えない結果となった。

保育をするに当たって、保育者が子どもの現状をとらえ、見直しを持って環境を整え、具体的な援助活動を行うためにも、計画の作成→実施→省察というルーチンを日常的に行うことは必須である。保育者が自分自身の援助活動を振り返り、客観的に評価することが保育の質の向上にもつながるのである。今後、計画を文書として作成することに関して、早急に保育者の意識を高めていくことが求められる。

また、③「子どもが主体的に遊びに取り組める環境を準備している」の項目については76%がA評価であるにもかかわらず、④の教材研究に関する項目については56%と低くなっている。つまり、主体的に取り組める環境を準備していると認識しているが、そのための教材研究は行われていないと解釈できる。本来、十分な教材研究がなされたうえで、保育計画の中で環境設定が行われなければならない。したがって、環境に変化がなく、子どもの特性や発達段階に応じた保育環境になっていない可能性がある。保育者の教材研究へのとりくみと保育室の環境構成との関連性については、今後、検討が必要であろう。

集団での保育と異なり、子どもの年齢や人数も多様な家庭的保育には、計画の作成にあたっての困難さがあることが予想される。また、保育者が単独で保育に当たっ

ている場合、省察の過程で客観的に自分の保育を振り返ることは難しい。このようなことから、家庭的保育に必要なとされる計画の作成とその視点、省察の方法については今後検討することが必要と考えられる。

3) 健康と安全

3) -1 子どもの健康支援

低年齢児の保育にあたっては特に保育者による健康面の管理が重要であり、そのことを保育者自身も十分に理解し、日頃から意識していることが示された。

しかし、子どもの健康に関する行政や医療機関など外部との連携、対応マニュアルの整備に関しては、課題が残った。こうした取り組みの重要性について保育者自身の認識をより高めていくことはもちろんだが、これらは保育者だけでは取り組むことが難しく外部からの協力や支援も欠かせない。家庭的保育に対する地域の各機関・専門職の理解をさらに図っていくことも必要である。

3) -2 環境・衛生・安全の管理

子どもが安全・快適に過ごせる環境やいざというときの対応は、保育を行う上で必要最低限のことであり、どの保育者も力を入れて取り組んでいることが窺われる。ただし、消毒や点検、備品の用意など具体的な取り組みについては、保育室それぞれの物理的な条件や制約が異なることもあって、意識はされているものの改善の余地も大きいことが示された。また、防犯や非常時の避難に関しては、自治体や地域の協力も必要であり、どのように連携体制を整えていくかということが課題である。

さらに、チェックリストや計画・記録など文書での安全の管理については、取り組みの徹底がまだ弱い部分であることが明らかとなった。文書作成の労力の負担が大きいといった理由だけでなく、一人または少人数の保育者による保育ということで、こうしたものがなくても保育者自身が実際に保育を行う上で不都合をほとんど感じないためと考えられる。

文書による管理は、確かに事務処理にかかる時間や手間も少なくはなく、またチェックリストや記録がありさえすれば万全というものでもない。日常の保育に追われる中でどうしても後回しになりがちな面と言えるが、保育の一定の質を確保するために、こうした取り組みによって客観性を保障することは非常に重要である。随時保育者自身や外部の人々が状況を確認できる仕組みを整えることで、新しい情報が入った場合の対応策等の更新や不備のチェックがしやすくなる。保育者の理解を深めるとともに、効率のよい文書作成のノウハウや具体的な例示など、取り組みやすくするための支援も必要と考えられる。

II-3 改善が必要と考えられる項目と案

1) 日々の保育における具体的ななかかわりと援助

⑩ 「子どもが興味を持って探索活動を十分に行えるような遊具や玩具がある」の項目については、コメントから、「探索活動」という言葉の理解が様々であること、「十分に」という表現がわかりにくいことがうかがえた。

そのため、変更案として、「1人ひとりの子どもの興味・関心に合わせた遊具や玩具を用意している」(変更案1)、「興味・関心を持てるような様々な遊具や玩具が用意されており、子どもが自分から遊べるような工夫がしてある。」(変更案2)を提案したい。

Ⅲ 保護者に対する支援

Ⅲ-1 結果の概要

1) 保護者との信頼関係および協力関係づくり

設定した5項目のうち、①子どもの発達を保護者と協力して支援、④子どもの様子に関する情報の共有、⑤保護者の子育ての悩みや相談に対する適切な対応についての3項目では、9割以上がA評価で、C評価はない。これら3項目に比べて、②保育方針や保育内容の保護者への伝達、③保護者の養育方針や思いの傾聴に関する2項目では、「やっているが、改善が必要」とするB評価が多い。特に、②については、5名(6.3%)がC評価としている。

2) 子育て・子育て支援に関する情報の収集および提供
全2項目の評価は、A～C評価にわたった。A評価は7割に満たず、B評価は3割程度となっている。C評価は1割以下であるが、特に、②子ども虐待に関する情報の収集と提供について、7名(8.8%)がC評価としている。

3) 子どもと保護者のプライバシーについて

設定した2項目ともに、9割以上がA評価である。その中で、①子どもとその家庭に関する書類の管理については、6名(7.5%)がB評価としている。また、②子どもとその家庭について知り得た情報の守秘については、B評価およびC評価とする保育者がそれぞれ1名となっている。

Ⅲ-2 結果の背景として考えられること・今後の課題

1) 保護者との信頼関係および協力関係づくり

子どもの保育は家庭的保育者だけでできるものではなく、保護者の理解と協力が不可欠である。調査結果から、その理解と協力を得るために取り組まれている状況が見えてきたものの、十分とは言い難い状況にあることも窺える。特に、②保育方針や保育内容の保護者への伝達についてはC評価もあり、前記のⅠ-3「保育理念と保育目標の設定」との関連から、そもそも保育方針等が設定されていない場合もあり得ることを忘れてはならない。

現在、家庭的保育者には保護者と協力して子どもの発達を支えるとともに、保護者の子育てを支援する役割が

課せられており、保護者の子育て力を伸ばしていくことが求められている。しかし、我が子に愛情を抱けない様子の保護者、うわさ話をしをかき回す保護者、迎える時間を守れない保護者などを列挙し、「保護者との信頼関係などがとても難しく感じております。」とのコメントもある。このように保護者との対応で困難を抱えている保育者に対して、助言し、相談に応じるスーパーバイザーが必要であり、今以上の整備が求められる。また、保育者自身も子育てパートナーシップの意識をよりいっそう持って保護者に対応し、保育方針や保育内容を丁寧に伝えていくとともに、保護者の養育方針と思いを傾聴してよく話し合っ、互いに理解し、納得したうえで保育していくようにすることも大切であると考え。

2) 子育て・子育て支援に関する情報の収集および提供

子育てに不安を抱き、悩んでいる保護者が少なくなく、子ども虐待が増加傾向にある今日、保育者からの子育てや子育て支援に関する情報の提供が強く求められている。そのため、A評価が大多数を占めてほしい項目であるが、評価は分かれた。保護者が必要としている情報を提供するには、収集した情報の中からの的確な情報を選択することが求められ、その難しさも一つの要因となっており、情報の収集・提供について十分に取り組まれているとはいえない状況となっているのではないだろうか。今後、関係機関や団体と連携するとともに、保育者1人ひとりが書物や新聞、インターネットなどの活用だけでなく研修会への参加、さらには家庭的保育者をはじめとしていろいろな領域の人々や地域の人々との交流を通して多くの情報を収集し、その中から保護者が必要としている情報を的確に選び、提供できるよう心がけるとともに、それをサポートする体制も必要であると考え。

3) 子どもと保護者のプライバシーについて

人間を対象として支援する仕事では、対象者のプライバシーに関わることになり、そのことを常に認識している必要がある。特に、保育者は子どもと保護者のプライバシーに深く関わらざるを得ず、その保護は保育の専門職者としての責務であり、保護者と協力して子どもの発達を支えていく上で大切な保護者との信頼関係づくりの第一歩でもある。そのため、全員がA評価であってほしい2項目であるが、調査結果では大多数がA評価であるものの、100%には至っていない。①子どもとその家庭に関する書類の管理については、「厳重に」の度合いから考えてB評価とした回答者もいたのではないだろうか。②子どもとその家庭について知り得た情報の守秘については、なぜC評価としたのか不明であるが、保育者の守秘義務について周知徹底していくことが必要であると考え。今後、家庭的保育者全員がA評価となるよう研修や自己学習、日々の保育を通して、子どもと保護者のプライバシー保護の意識を確固たるものとしていくことが求

められる。

III-3 改善が必要と考えられる項目と案

1) 保護者との信頼関係および協力関係づくり

⑥「保護者の子育ての悩みや相談に対し、適切な対応ができるよう心がけている。」の項目について、経験だけでの対応では問題も起こりやすいため、専門性に基づく対応が必要であるとして「適切な対応」とした。しかし、「適切な」という表現が曖昧なことから、より具体的に「保護者の子育ての悩みや相談に対し、倫理観に裏付けられた専門的知識・技術を用いて対応できるよう心がけている。」という変更案を提案する。

2) 子育て・子育て支援に関する情報の収集および提供

①「子育てや子育て支援資源（団体・機関）の情報を収集し、保護者に提供している。」の項目について、「子育てや子育て支援資源」がわかりにくいとのコメントもあり、また、「収集し、～提供している」では回答に迷う場合も起こり得るため、変更案として、「子育てや子育て支援に関して保護者に提供できる情報を収集している。」を提案する。

②「子どもの虐待について知識を深め、保護者に知識や関係機関についての情報を提供できるよう心がけている。」の項目について、「子ども虐待」の方がわかりやすく、また、知識を深めて保護者に提供することから、「子ども虐待について、保護者に知識や関係機関についての情報を提供できるよう心がけている。」という変更案を提案する。

IV 保育を支える組織的基盤

IV-1 結果の概要

1) 研修の受講や専門性向上の努力について

「現任研修に参加」はA評価が61.3%で、C評価は12.5%と少ない。現任研修の内容までは踏み込んでいないので、A評価が過半数ではあるとはいえ、自治体の保育士等と合同の現任研修参加等も含まれている可能性は高い。所属する自治体により現任研修への取り組みが異なり、なにを現任研修として評価したかが少々あいまいであることは否めない。

「自己研鑽」の自己評価は高く7割を超えている。「家庭的保育者の団体やネットワークに参加し、交流や情報交換をしている」という項目は82.5%がA評価で、B評価が17.5%だった。これは調査の対象者が会員組織の会員だったことを反映しているといえる。家庭的保育者全体では組織に加入していない保育者も多いので、もっと数値が低いと推測できる。

保育士資格を保有していない20名（25.3%）のなかで資格取得を目指して勉強しているのは6名、半数の10名はC評価で取得をめざして勉強してはいない。日常の

保育をしながら、受験勉強をするのは並大抵ではないが、努力している保育者がいることは励まされる場所である。

2) 保育と家庭のバランスについて

「家族の理解と協力を得て保育している」はA評価が92.5%、と圧倒的であった。理解と協力は不可欠といっただけで、C評価がゼロ回答に安心するが、全員がA評価でないことには一抹の不安を感じる。家族があまり協力的でないことと保育者のストレスになりやすいと思われるからである。

「家族のために必要な休暇が取れる」は回答がそれぞれ30%台と3分割となっている。学童期の子どもへの授業参観や父母会、行事等に参加するために、保育を休むとなると保護者に迷惑をかけることになるからであろう。独り保育の場合はとくに休暇の取得は難しいといえる。保育と家庭との両立を可能にするには一時保育の利用や代替保育の体制が整備されることが望ましい。今後、連携保育所が充実すれば、もっとA評価が増えるものと考えられる。

3) 支援体制づくり

家庭的保育が孤立的な密室保育に陥らないためには、地域に開かれた保育を実践することが不可欠である。「支援体制づくり」はその具体的な努力についてチェックする項目を設定している。

①自治体の巡回指導や相談の機会を積極的に活用している

A評価が65%、B評価が20%、C評価は約9%（7名）である。しかし、そもそも「巡回や相談の機会がない」という書き込みもあり、自治体間に支援の較差があることがわかる。今後はすべての自治体で訪問型の支援が整備されるよう期待したい。

②連携保育所を積極的に活用している

A評価は3割台で無回答が17.5%もある。「連携がない」という書き込みが複数あり、まだ連携保育所が少ない実態が明らかである。連携までとはいかないが行事参加や園庭開放などで保育所を利用する例はよく見聞きする。また、「活用できるほど近くない」という記述もあり、移動手段等が確保されなければ積極的な活用は難しいといえる。

③保健所や児童相談所など相談内容に応じた関係機関を把握している

A評価は過半数の55%である。日常的には関係が薄くとも、乳幼児を保育する立場として公的な機関である保健所や児童相談所の場所や連絡先を把握しておくことは必要である。今回をきっかけに調べて把握して欲しい。

④保育所、児童館、図書館、公園など地域の資源を活用している

A評価が77.5%と大多数が活用しているといえよう。

しかしB評価が18.8%あり、近くに利用できる資源がないのか、移動が困難か、子どもの年齢等により活用の必要性が低いのか、資源側の条件かなど、理由を明らかにして改善を図り、保育内容を豊かにしたいものである。

⑤病気や用事で保育ができない時には代替保育の制度を利用する

A評価は約3分の1強、無回答も多い。「代替保育の制度がない」という書き込みがいくつもあり、代替保育を利用できているのは約3分の一強にすぎない。代替保育は保育者が一般的な労働者に保障されている休暇を取得するためには不可欠な条件であるが、見知らぬ環境にいきなり子どもを託すことへの抵抗感も強く、時々訪問して親しんでいる場所など安心して預けられる条件を備えた代替保育の整備が望まれる。

⑥保育の補助者や協力者といっしょに保育している

今回の回答者の86.3%がA評価で、ほとんどが補助者等といっしょに保育しているが、補助者なしの保育をしている若干名の存在が気になることである。自治体による保育補助者雇用補助もまだまだ地域較差が大きいことも今後の課題である。

支援体制については保育者個人の努力よりも自治体等の努力に負う事柄も多いといわねばならない。

4) 保育者の健康維持管理

家庭的保育の場合、保育の代替が難しい点からも保育者の健康管理は重要である。身体的にも心理的にも健康であることが保育に直接影響する。年1回の健康診断は全員がA評価であったことは、何らかの規則を遵守しているともいえる。日常的な健康管理も91.1%がA評価である。「精神衛生上ストレスためないように気をつけている」となるとA評価は80.0%に落ちる。孤立しやすい家庭的保育者のストレスマネジメントはもっと重視されてよいのではないかと考える。

5) 保育の運営管理

賠償責任保険等の加入に関しては全員がA評価である。財務管理も自治体による監査等も実施されていることからA評価が77.5%と高い。しかし、18.8%は改善の必要性を感じている。保育関係費と家計費の明確化も27.5%が改善の必要性を感じているおり、財務管理の具体的な方法を学ぶ機会が必要であろう。

近隣からの理解や協力を得るための努力については83.8%がA評価で、相当に努力していると評価している。しかし16.3%はまだ改善の必要性を感じている。家庭的保育者が地域の人であることから、保育を継続していく上で、近隣とのトラブルは致命的ともいえる。近隣から家庭的保育への理解と協力を得る工夫をすることは今後も非常に重要である。

IV-2 結果の背景として考えられること・今後の課題

家庭的保育を実施・継続していくためには、保育所とは異なる枠組みが必要である。ここでは、家庭的保育を支える組織的基盤として、保育の質を高める研修や自己研鑽、公共機関や地域資源の活用による支援体制づくり、保育を継続する上で欠かせない家族の理解、個人事業主としての財務管理、万に備えての保険等への加入、保育者自身の健康管理、近隣の理解や協力の確保などをチェック項目として設定した。しかし現状は家庭的保育を実施しているすべての自治体で十分な基盤整備や支援体制が整っているわけではない。それぞれの自治体に登録している保育者は、その制約のなかで保育しているのが現実である。それらを踏まえた上での自己評価であることを考慮したい。

IV-3 改善が必要と考えられる項目と案

支援体制づくりの項目では、「自治体に対して支援体制の充実等を働きかけているか。」という項目を加える。

IV まとめと今後の課題

本年度研究では、家庭的保育で最低限行われているべきと考えられる評価項目68項目を基礎編として作成し、家庭的保育者の自己評価のためのツールとして活用が可能かどうかを質問紙調査により検証した。その結果、全体として家庭的保育者の自己評価が高い項目が多いという結果が得られたが、自己評価が低い項目からは家庭的保育の特徴や課題が改めて浮き彫りになったとも言える。

日々の保育の中で、保育者が1人ひとりの子どもに対して、応答的・共感的にかかわっていると自覚しているという現状は、子どもの様子に常に目を配り、丁寧にかかわることができる家庭的保育の利点が示されたものであり、また、保育者自身が、低年齢児にとっての保育者という存在の重要性を意識してかかわっていることがうかがえる。特に低年齢の子どもにとって、保育者との愛着関係が成長・発達の基盤となることを考えると、ふさわしい環境であると考えられる。

また、保護者との協力関係や子どもの様子についての情報の共有についての評価が高く、これも家庭的保育の特徴が表されたものと言える。

しかし、全体として計画（指導計画、防災計画）及び記録（保育記録等）の作成・保存、安全チェックシートやマニュアルなどの文書の作成、関係機関との連携・活用の状況などでは、保育者自身もまだ十分でないと感じる評価が見られている。さらには、支援体制等については保育者個人の努力よりも自治体等の努力に負う事柄も多い。

本調査で保育者自身が十分にできていないと感じている項目については、研修等により理解を深め、実践の方法を学ぶ機会を設けることが必要であると同時に、家庭的保育だけでは充足できないことについては、関係機関

との連携、地域資源の活用、支援体制の充実などを図る必要がある。

この点について家庭的保育支援者、巡回指導者、連携保育所の園長なども意見交換をすることにより、改善への糸口を見いだすことにつながることを期待される。調査に協力した回答者からは、自分の保育をふり返る機会になり、また自分の保育の足りない部分が明確になったとの評価が得られた。しかし、それは自己評価に過ぎず、個々人の自己評価の基準には相当なブレが存在すると考えられることから、本年度研究で行った家庭的保育者の自己評価の結果や評価項目の文章表現へのコメントを踏まえ、評価項目には若干の改訂を加えた上で、次年度には家庭的保育支援者や巡回指導者等に本評価項目を実際に使ってもらい、他者からの評価項目としても活用が可能かどうかの検証を行うことが課題となる。

最後に、本評価項目の開発が、家庭的保育における保育の質の標準化に資するものとなることを期待される。

参考文献：

- 1) 小山修、庄司順一他、「家庭的保育のあり方に関する調査研究（１）」、日本子ども家庭総合研究所紀要第 43 集（平成 18 年度）、2007
- 2) 小山修、庄司順一他、「家庭的保育のあり方に関する調査研究（２）」、日本子ども家庭総合研究所紀要第 44 集（平成 19 年度）、2008
- 3) 小山修、庄司順一他「家庭的保育のあり方に関する調査研究（３）」、日本子ども家庭総合研究所紀要第 45 集（平成 20 年度）、2009
- 4) 網野武博他「家庭的保育者（保育ママ）の研修についての調査研究」平成 20 年度児童関連サービス調査研究等事業報告書、財団法人こども未来財団、2009
- 5) 増田まゆみ他「就学前の保育・教育を一体とした総合施設のサービスの質に関する研究」平成 18 年度総括研究報告書、2007
- 6) 社会福祉法人全国社会福祉協議会『『保育内容等の自己評価』のためのチェックリスト』保母編・園長編、1996
- 7) 社会福祉法人全国社会福祉協議会、全国保育協議会、「保育の質と信頼感をより一層高めるために あなたの園の自己点検（「第三者評価基準」の解釈と運用）」、2002
- 8) テルマハームス＋リチャードM. クリフォード他著、「保育環境評価スケール①幼児版」（埋橋玲子訳）、法律文化社、2004
- 9) テルマハームス＋リチャードM. クリフォード他著、「保育環境評価スケール②乳児版」（埋橋玲子訳）、法律文化社、2004
- 10) 埋橋玲子、「保育評価への多様なアプローチ異なる評価方法間の対話―」第 61 回日本保育学会・自主シンポジウム資料
- 11) 保育パワーアップ研究会「育児環境指標」、「保育環境スケール」、「園児発達チェックリスト」、<http://square.umin.ac.jp/Child/>
- 12) Thelma Harms, Debby Cryer et.al、FAMILY CHILD CARE ENVIRONMENT RATING SCALE revised edition、Teachers College Press、2007
- 13) Thelma Harms, Ph.D., Basic Components of Quality in Early Childhood Programs, , IFDCO 1 Conference, 2009
- 14) Thelma Harm, Ph.D., The Professionalization of Family Child Care: steps towards providing quality child care in a home setting, IFDCO 1 Conference, 2009
- 15) Canadian Child Care Federation, The family Child Care Training Project Level 1 Unit One: Your Child Care Home” , <http://www.cccf-fcsge.ca/english/resources/oneoneenvironment.htm>
- 16) Office of the Minister for Children and Youth Affairs Ireland, 「national guidelines for childminders, revised edition : August 2008, , 2008
- 17) Waterford County Childcare Committee ,Childminding First Steps,2009
- 18) Ronnie Hill, Do childminders make the grade?, IFDCO Conference, 2009
- 19) 「保育士のための自己評価チェックリスト 平成 20 年告示 保育所保育指针对応、「保育士のための自己評価チェックリスト」編集委員会(代表民秋言)、萌文書院、2008
- 20) 保育総合研究所監修、「新保育所保育指針に基づく自己チェックリスト 100」、樹世界文化社、2009
- 21) 厚生労働省「保育所における自己評価ガイドライン」、2009

表1 家庭的保育評価項目(基礎編)

I 保育理念 (3項目)

1. 家庭的保育に関する規定や関係法令を理解し、遵守している。
(規定とは児童福祉法、省令、ガイドライン、自治体の要綱など関係法令とは児童権利条約、児童虐待防止法など)
2. 子どもの人権に十分配慮し、子ども1人ひとりの人格を尊重している。
3. 保育理念と保育目標を「保育所保育指針」に基づき決めている。

II 子どもの発達援助 (37項目)

1. 日々の保育における具体的ななかかわりと援助

-保育内容との関連及び養護と教育の一体的展開- 15項目

- ① 個々の食事や睡眠などの欲求に応じて、心地よく過ごせるようにしている。
- ② 子どもの表情や発声などにタイミングよく、応答的に対応している。
- ③ 家庭と連携を取りながら、食べることへの意欲を持てるようにしている。
- ④ 1人ひとりの子どもとの信頼関係を築こうとしている。
- ⑤ 子どもの言葉にならない気持ちや思いを受け止め、共感的にかかわっている。
- ⑥ 自分でしようとする気持ちを大切に、衣服の着脱への意欲が持てるように援助を行っている。
- ⑦ 子どもの挑戦する気持ちや興味・関心を大切に、様々な遊びを体験できるように配慮している。
- ⑧ 保育者や友だちと一緒に生活したり、遊んだりすることの楽しさや心地よさを感じられるように配慮している。
- ⑨ 友だちとのなかかわりを仲介したり、様々な人と触れあう機会を設けている。
- ⑩ 散歩や戸外での活動を通して、動物や植物と直接触れあう遊びを取り入れている。
- ⑪ 子どもが興味を持って探索活動を十分に行えるような遊具や玩具がある。
- ⑫ 子どもの興味や関心に合わせて、子どもたちが自分で手に取れる場所に絵本などを用意している。
- ⑬ 子どもの気持ちを代弁したり、次にすることを言葉に出して語りかけたりしている。
- ⑭ 様々な素材や用具に親しんだり、感動や発見ができる活動の工夫をしている。
- ⑮ 子どもと一緒に歌ったり、手遊びをしたり、リズムに合わせて動いたりする活動を行っている。

2. 保育の計画及び評価

- ① それぞれの年齢に合った指導計画を作成している。
- ② 年齢差が大きい場合は、個々の発達や興味・関心に応じた遊びが十分にできるように環境構成や時間配分を行っている。
- ③ 子どもが主体的に遊びにとりくめる環境を準備している。
- ④ 保育の中で用いる素材や材料などについて研究し、子どもに適したものを準備している。
- ⑤ その日の保育を振り返り、内容やなかかわりなどの記録を行っている(1日、一週間など)。
- ⑥ 振り返りを通しての気づきを、次の日、次の週の計画に生かしている。

3. 健康と安全

(1) 子どもの健康支援

- ① 子どもの様子をよく観察し、健康状態を定期的、継続的に把握している。
- ② 体温・睡眠時間・授乳の時間等、必要事項について毎回家庭と情報を共有している。
- ③ 感染症やその他の疾病について基礎的な知識を持ち、自治体からの通知等をふまえた対応マニュアルを備えている。
- ④ 感染症が発生した際は、口頭及び文書や掲示板等で全ての保護者に状況を伝えている。
- ⑤ 子どもの健康状況について、医療機関などに相談や連携ができる体制がとられている。
- ⑥ 子どものアレルギーに関して、あらかじめ保護者から十分な聞き取りを行い、情報を共有している。

(2) 環境・衛生・安全の管理

- ① 採光・換気・温度・湿度など、子どもが心地よく過ごすことのできる環境を整備している。
- ② 子どもが眠っているとき、SIDSを防止するための具体的な取り組みを行っている。
- ③ 子どもが直接触れる食器、寝具、遊具などは定期的に消毒や乾燥を行っている。
- ④ 安全チェックリストの作成等、事故防止に向けた取り組みを行っている。
- ⑤ 家具や遊具等の安全点検を定期的実施している。
- ⑥ 救急用品や消火器等、非常時に必要な備品はすぐに使用できるよう用意されている。
- ⑦ 火災や地震の発生を想定した防災計画がある。
- ⑧ 出入口の管理、防犯体制のチェックなど、不審者の進入を防ぐ対策を行っている。
- ⑨ 緊急時の避難訓練を定期的実施し、その記録を保存している。
- ⑩ 緊急時の通報先や保護者への緊急連絡先をすぐに確認できるよう準備している。

III. 保護者に対する支援 (9項目)

1. 保護者との信頼関係および協力関係づくり

- ① 子どもの発達を保護者と協力して支えるよう心がけている。
- ② 保育方針や保育内容を保護者に口頭や保育室だよりなどで伝えている。
- ③ 保護者の養育方針や思いに耳を傾け、話し合うようにしている。
- ④ 送迎時の会話や連絡帳などを通して、子どもの様子について情報を共有している。
- ⑤ 保護者の子育ての悩みや相談に対し、適切な対応ができるよう心がけている。

2. 子育て・子育て支援に関する情報の収集および提供

- ① 子育てや子育て支援資源（団体・機関）の情報を収集し、保護者に提供している。
- ② 子どもの虐待について知識を深め、保護者に知識や関係機関についての情報を提供できるよう心がけている。

3. 子どもと保護者のプライバシーについて

- ① 子どもとその家庭に関する書類は厳重に管理している。
- ② 子どもとその家庭について知り得た情報は、正当な理由がない限り外に漏らさないようにしている。

IV. 保育を支える組織的基盤 （19項目）

1. 研修の受講や専門性向上の努力について

- ① 専門性向上のために、現任研修に参加している。
- ② 保育に関する情報収集や参考書の入手など自己研鑽している。
- ③（保育士資格を保有しない場合）保育士資格取得を目指して勉強している。
- ④ 家庭的保育者の団体やネットワークに参加し、交流や情報交換をしている。

2. 保育と家庭のバランス

- ① 家庭で保育することに対して、家族の理解と協力を得ている。
- ② 家族のために必要なときに休暇が取れる。

3. 支援体制づくり

- ① 自治体等の巡回指導や相談の機会を積極的に活用している。
- ② 連携保育所等を積極的に活用している。
- ③ 保健所や児童相談所など相談内容に応じた関係機関を把握している。
- ④ 保育所、児童館、図書館、公園など地域の資源を活用している。
- ⑤ 病気や用事で保育ができない時には代替保育の制度を利用する。
- ⑥ 保育の補助者や協力者といっしょに保育している。

4. 保育者の健康維持管理

- ① 健康診断は年1回している。
- ② 日常的に体調管理に気をつけている。
- ③ 精神衛生上ストレスをためないように気をつけている。

5. 保育の運営管理

- ① 保育関係費と家計費を明確に分けて把握している。
- ② 出納帳等必要な経理書類を整えて財務管理を適切に行っている。
- ③ 賠償責任保険や傷害保険等、万一のために保険に加入している。
- ④ 近隣から家庭的保育についての理解と協力を得られるよう気を配っている

表2 回答者のプロフィール

2-1 保育歴

全体	2年以下	3～5年	6～9年	10年～	16年～
80	7	13	16	30	14
100.0	8.8	16.3	20.0	37.5	17.5

2-2-1 勤務歴(あり)の数 (複数回答)

全体	保育所	認可外 保育施設	幼稚園	その他
80	39	13	15	30
100.0	48.8	16.3	18.8	37.5

2-2-2 認可保育所勤務歴

全体	2年以下	3～5年	6～9年	10年～	16年～
39	7	8	5	8	11
100.0	17.9	20.5	12.8	20.5	28.2

2-3 年齢

全体	～30歳代	40歳代	50歳代	60歳代～
80	4	11	42	23
100.0	5.0	13.8	52.5	28.8

2-4 資格(あり)の数 (複数回答)

全体	保育士	看護師	幼稚園 免許	学校教員
80	58	2	47	17
100.0	72.5	2.5	58.8	21.3

表3 所属自治体の制度について

3-1 連携保育所の有無

全体	あり	なし
80	63	17
100.0	78.8	21.3

3-2 研修時の保育

全体	代替保育 あり	休暇	保育時間以 外に受講	その他	無回答
80	26	24	32	10	2
100.0	32.5	30.0	40.0	12.5	2.5

3-3 代替保育の仕組み

全体	あり	なし	無回答
80	52	26	2
100.0	65.0	32.5	2.5

表4 評価結果 (A:できている、B:やっているが、改善が必要、C:できていない、または、やっていない)

I 保育理念		全体	A	B	C	無回答
1	家庭的保育に関する規定や関係法令を理解し、遵守している。	80	54	24	1	1
		100.0	67.5	30.0	1.3	1.3
2	子どもの人権に十分配慮し、子ども1人ひとりの人格を尊重している。	80	77	3	0	0
		100.0	96.3	3.8	0.0	0.0
3	保育理念と保育目標を「保育所保育指針」に基づき決めている。	80	44	27	7	2
		100.0	55.0	33.8	8.8	2.5

II 子どもの発達援助

1 日々の保育における具体的ななかかわりと援助

1 日々の保育における具体的ななかかわりと援助		全体	A	B	C	無回答
①	個々の食事や睡眠などの欲求に応じて、心地よく過ごせるようにしている。	80	79	1	0	0
		100.0	98.8	1.3	0.0	0.0
②	子どもの表情や発声などにタイミングよく、応答的に対応している。	80	73	7	0	0
		100.0	91.3	8.8	0.0	0.0
③	家庭と連携を取りながら、食べることへの意欲を持てるようにしている。	80	69	11	0	0
		100.0	86.3	13.8	0.0	0.0
④	一人ひとりの子どもとの信頼関係を築こうとしている。	80	76	4	0	0
		100.0	95.0	5.0	0.0	0.0
⑤	子どもの言葉にならない気持ちや思いを受け止め、共感的にかかわっている。	80	72	8	0	0
		100.0	90.0	10.0	0.0	0.0
⑥	自分でしようとする気持ちを大切にし、衣服の着脱への意欲が持てるように援助を行っている。	80	71	8	0	1
		100.0	88.8	10.0	0.0	1.3
⑦	子どもの挑戦する気持ちや興味・関心を大切に、様々な遊びを体験できるように配慮している。	80	61	19	0	0
		100.0	76.3	23.8	0.0	0.0
⑧	保育者や友だちと一緒に生活したり、遊んだりすることの楽しさや心地よさを感じられるように配慮している。	80	75	5	0	0
		100.0	93.8	6.3	0.0	0.0
⑨	友だちとのなかかわりを仲介したり、様々な人と触れあう機会を設けている。	80	67	13	0	0
		100.0	83.8	16.3	0.0	0.0
⑩	散歩や戸外での活動を通して、動物や植物と直接触れあう遊びを取り入れている。	80	69	10	1	0
		100.0	86.3	12.5	1.3	0.0
⑪	子どもが興味を持って探索活動を十分に行えるような遊具や玩具がある。	80	47	33	0	0
		100.0	58.8	41.3	0.0	0.0
⑫	子どもの興味や関心に合わせて、子どもたちが自分で手に取れる場所に絵本などを用意している。	80	74	6	0	0
		100.0	92.5	7.5	0.0	0.0
⑬	子どもの気持ちを代弁したり、次にすることを言葉に出して語りかけたりしている。	80	74	6	0	0
		100.0	92.5	7.5	0.0	0.0
⑭	様々な素材や用具に親しんだり、感動や発見ができる活動の工夫をしている。	80	55	24	1	0
		100.0	68.8	30.0	1.3	0.0
⑮	子どもと一緒に歌ったり、手遊びをしたり、リズムに合わせて動いたりする活動を行っている。	80	71	9	0	0
		100.0	88.8	11.3	0.0	0.0

2 保育の計画及び評価

2 保育の計画及び評価		全体	A	B	C	無回答
①	それぞれの年齢に合った指導計画を作成している。	80	38	22	16	4
		100.0	47.5	27.5	20.0	5.0
②	年齢差が大きい場合は、個々の発達や興味・関心に応じた遊びが十分にできるように環境構成や時間配分を行っている。	80	50	28	0	2
		100.0	62.5	35.0	0.0	2.5
③	子どもが主体的に遊びにとりくめる環境を準備している。	80	61	19	0	0
		100.0	76.3	23.8	0.0	0.0
④	保育の中で用いる素材や材料などについて研究し、子どもに適したものを準備している。	80	45	33	2	0
		100.0	56.3	41.3	2.5	0.0
⑤	その日の保育を振り返り、内容やかかわりなどの記録を行っている(1日、一週間など)。	80	57	16	4	3
		100.0	71.3	20.0	5.0	3.8
⑥	振り返りを通しての気づきを、次の日、次の週の計画に生かしている。	80	44	31	4	1
		100.0	55.0	38.8	5.0	1.3

3 健康と安全

(1) 子どもの健康支援

(1) 子どもの健康支援		全体	A	B	C	無回答
①	子どもの様子をよく観察し、健康状態を定期的、継続的に把握している。	80	77	3	0	0
		100.0	96.3	3.8	0.0	0.0
②	体温・睡眠時間・授乳の時間等、必要事項について毎回家庭と情報を共有している。	80	79	1	0	0
		100.0	98.8	1.3	0.0	0.0
③	感染症やその他の疾病について基礎的な知識を持ち、自治体からの通知等をふまえた対応マニュアルを備えている。	80	64	14	2	0
		100.0	80.0	17.5	2.5	0.0
④	感染症が発生した際は、口頭及び文書や掲示板等で全ての保護者に状況を伝えている。	80	76	4	0	0
		100.0	95.0	5.0	0.0	0.0

	全体	A	B	C	無回答
⑤ 子どもの健康状況について、医療機関などに相談や連携ができる体制がと	80	34	25	21	0
	100.0	42.5	31.3	26.3	0.0
⑥ 子どものアレルギーに関して、あらかじめ保護者から十分な聞き取りを行	80	72	3	1	4
	100.0	90.0	3.8	1.3	5.0

(2) 環境・衛生・安全管理

① 採光・換気・温度・湿度など、子どもが心地よく過ごすことのできる環境	80	77	3	0	0
	100.0	96.3	3.8	0.0	0.0
② 子どもが眠っているとき、SIDSを防止するための具体的な取り組みを	80	61	16	2	1
	100.0	76.3	20.0	2.5	1.3
③ 子どもが直接触れる食器、寝具、遊具などは定期的に消毒や乾燥を行って	80	66	14	0	0
	100.0	82.5	17.5	0.0	0.0
④ 安全チェックリストの作成等、事故防止に向けた取り組みを行っている。	80	38	34	7	1
	100.0	47.5	42.5	8.8	1.3
⑤ 家具や遊具等の安全点検を定期的実施している。	80	62	15	2	1
	100.0	77.5	18.8	2.5	1.3
⑥ 救急用品や消火器等、非常時に必要な備品はすぐに使用できるよう用意さ	80	64	16	0	0
	100.0	80.0	20.0	0.0	0.0
⑦ 火災や地震の発生を想定した防災計画がある。	80	51	17	11	1
	100.0	63.8	21.3	13.8	1.3
⑧ 出入口の管理、防犯体制のチェックなど、不審者の進入を防ぐ対策を	80	57	18	3	2
	100.0	71.3	22.5	3.8	2.5
⑨ 緊急時の避難訓練を定期的実施し、その記録を保存している。	80	46	16	18	0
	100.0	57.5	20.0	22.5	0.0
⑩ 緊急時の通報先や保護者への緊急連絡先をすぐに確認できるよう準備して	80	74	5	1	0
	100.0	92.5	6.3	1.3	0.0

III 保護者に対する支援

1 保護者との信頼関係および協力関係づくり

	全体	A	B	C	無回答
① 子どもの発達を保護者と協力して支えるよう心がけている。	80	75	5	0	0
	100.0	93.8	6.3	0.0	0.0
② 保育方針や保育内容を保護者に口頭や保育室だよりなどで伝えている。	80	61	14	5	0
	100.0	76.3	17.5	6.3	0.0
③ 保護者の養育方針や思いに耳を傾け、話し合うようにしている。	80	65	15	0	0
	100.0	81.3	18.8	0.0	0.0
④ 送迎時の会話や連絡帳などを通して、子どもの様子について情報を共有し	80	79	1	0	0
	100.0	98.8	1.3	0.0	0.0
⑤ 保護者の子育ての悩みや相談に対し、適切な対応ができるよう心がけてい	80	73	7	0	0
	100.0	91.3	8.8	0.0	0.0

2 子育て・子育て支援に関する情報の収集および提供

① 子育てや子育て支援資源（団体・機関）の情報を収集し、保護者に提供し	80	55	22	3	0
	100.0	68.8	27.5	3.8	0.0
② 子どもの虐待について知識を深め、保護者に知識や関係機関についての情	80	47	26	7	0
	100.0	58.8	32.5	8.8	0.0

3 子どもと保護者のプライバシーについて

① 子どもとその家庭に関する書類は厳重に管理している。	80	73	6	0	1
	100.0	91.3	7.5	0.0	1.3
② 子どもとその家庭について知り得た情報は、正当な理由がない限り外に漏	80	78	1	1	0
	100.0	97.5	1.3	1.3	0.0

IV 保育を支える組織的基盤

1 研修の受講や専門性向上の努力について

	全体	A	B	C	無回答
① 専門性向上のために、現任研修に参加している。	80	49	18	10	3
	100.0	61.3	22.5	12.5	3.8
② 保育に関する情報収集や参考書の入手など自己研鑽している。	80	60	16	4	0
	100.0	75.0	20.0	5.0	0.0
③ 保育士資格を保有しない場合）保育士資格取得を目指して勉強している。	80	6	4	10	60
	100.0	7.5	5.0	12.5	75.0
④ 家庭的保育者の団体やネットワークに参加し、交流や情報交換をしてい	80	66	14	0	0
	100.0	82.5	17.5	0.0	0.0

2 保育と家庭のバランス		全体	A	B	C	無回答
① 家庭で保育することに対して、家族の理解と協力を得ている。	80	74	4	0	2	
	100.0	92.5	5.0	0.0	2.5	
② 家族のために必要なときに休暇が取れる。	80	25	28	26	1	
	100.0	31.3	35.0	32.5	1.3	
3 支援体制づくり		全体	A	B	C	無回答
① 自治体等の巡回指導や相談の機会を積極的に活用している。	80	52	16	7	5	
	100.0	65.0	20.0	8.8	6.3	
② 連携保育所等を積極的に活用している。	80	27	33	6	14	
	100.0	33.8	41.3	7.5	17.5	
③ 保健所や児童相談所など相談内容に応じた関係機関を把握している。	80	44	28	6	2	
	100.0	55.0	35.0	7.5	2.5	
④ 保育所、児童館、図書館、公園など地域の資源を活用している。	80	62	15	2	1	
	100.0	77.5	18.8	2.5	1.3	
⑤ 病気や用事で保育ができない時には代替保育の制度を利用する。	80	31	13	9	27	
	100.0	38.8	16.3	11.3	33.8	
⑥ 保育の補助者や協力者といっしょに保育している。	80	69	6	4	1	
	100.0	86.3	7.5	5.0	1.3	
4 保育者の健康維持管理		全体	A	B	C	無回答
① 健康診断は年1回している。	80	80	0	0	0	
	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	
② 日常的に体調管理に気をつけている。	80	73	6	0	1	
	100.0	91.3	7.5	0.0	1.3	
③ 精神衛生上ストレスをためないように気をつけている。	80	64	14	0	2	
	100.0	80.0	17.5	0.0	2.5	
5 保育の運営管理		全体	A	B	C	無回答
① 保育関係費と家計費を明確に分けて把握している。	80	56	22	2	0	
	100.0	70.0	27.5	2.5	0.0	
② 出納帳等必要な経理書類を整えて財務管理を適切に行っている。	80	62	15	3	0	
	100.0	77.5	18.8	3.8	0.0	
③ 賠償責任保険や傷害保険等、万一のために保険に加入している。	80	80	0	0	0	
	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	
④ 近隣から家庭的保育についての理解と協力を得られるよう気を配っている。	80	67	13	0	0	
	100.0	83.8	16.3	0.0	0.0	